芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No. 49　56. 2

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・挾　間　正　年　編集人・尾　登　一　信

県民文化育成に望む

大分県芸術文化振興会議副会長
大分県高等学校文化連盟会長　糸　永　正　武

80年代は、地方の時代の幕開けにふさわしく、企業の進出、交通体系の整備等将来の展望に満ちた未来像が示され、県民の心の礎となるべき芸術も、芸術会館の創設を契機として各関係者の尽力によって盛り上がりを見せて来た。

芸術のもつ意義は、いうまでもなく、人間の知的欲求の練磨であると同時に、人間の活力の象徴である。

地方文化の振興こそ、まさしく芸術そのものの意義を活力として受けとめ、拡大しなければならない。

現代社会の科学技術の進歩は、人間の倫理に反射して来た。教育の根幹は、心豊かな未来にはばたく人間を育成するものである。人間性を培う教育をあらゆる分野で、創意工夫のもとに実施しなければならない。

ただ単に知識を身につけさせるのではなく、そこに考え、思索し自らを究めることこそ教育の原点であることを知り、主体的な活動の中から創造する力を養い、いつくしむ心を育成することが必要である。

現代の教育の中で、芸術のもつ意義は大きく、情操豊かな教育実践があってはじめて、その目標への前進があり、指導者への期待が大きい。

県芸術祭の諸行事も年々盛大に、さらに厚みを加え、今年度も成功裡に終了することができた。

しかし、その陰には、各関係者のご労苦と配慮は筆舌には尽くし難く、演劇や吹奏楽等その練習場もなく、文化活動の場としての施設はできないものだろうか。

昨年、全国高等学校総合文化祭が、石川県金沢市で開催され、大分県からは、17校、280名が参加し、各県の優れた文化遺産が高校生の手によって披露され、大分県の文化活動の水準の高さを示すことができたが、何と言っても地域での指導者の情熱を痛感させられた。

県民文化の振興は、文化施設設備の充実と指導者の育成こそ80年代の緊急課題ではなかろうか。

高等学校の文化連盟が結成されて今年で30周年になり、戦後の混乱の中に求めた識者の英知は、脈々として流れ、歴史の重さと共にそれぞれの部門ごとに変遷はあったにせよ、その伝統は、各地方文化の中に育っており、学校教育のみでは成し得ない、成果を見出すことができる。伝統芸能として、若人の感動を育て、美しい心の調べとして、地域社会に密着した人間としての強さを教えこむ教育が、望まれてならない。

堆積の風景
自由美術協々会員　十時　良

科学者としての 三浦梅園

大分合同新聞社編集局次長　高　浦　照　明

三浦梅園が生まれたのは、いまから160年ほど前の享保8年（1723年）、江戸時代中期8代将軍吉宗のときであり、「解体新書」を飜訳した中津藩の前野良沢もこの年に江戸藩邸で生まれている。梅園は杵築藩内国東半島の山あい、現安岐町富永の地を生涯ほとんど離れることなく、祖父の代からの家業である医業を続けながら、あの難解にして幽玄な哲学「条理の学」をつくりあげたのである。没したのは寛政元年（1789年）67歳。ときに帆足万里10歳、広瀬淡窓7歳だった。

梅園については現在、わが国最高の哲学者としての評価がなされているが、「科学者・三浦梅園」となると、いささかのとまどいを感じる。確かにあるシリーズでは「哲学事典」には梅園の名がなく、「科学思想事典」の方に収載している。といって科学思想家が科学者であるとは限らない。また当時に科学者というものがあったかどうか、も気になるところである。「科学」とはその語源からみると「科」は「ものをはかる」ことであり、「事物現象を観測し、そこから理論を導き出す」学問のことであり、それをなすものを「科学者」ということになろう。

とすると、当時最高の天文学者といわれていた麻田剛立（梅園の師・綾部絅斎の末子で梅園の親友）などが科学者といえよう。この剛立は梅園の哲学を「こんなむずかしいことは私には苦手だから」といって、いささか敬遠していたそうだ。ところが、だからといって梅園がいうところの「科学者」でない、とは断定出来ないのである。つまり、前述の科学の定義における「観測」を「観察」に置き換えると、梅園の学問は「科学」である、ということになる。この場合の観測は定量的であるのに対し、観察は定性的である。

まず、梅園の哲学は徹底した自然界の事物現象（当然人間も含まれる）の観察によって構築されていることを指摘しなければならない。梅園の「多賀墨郷に答える書」に、次の記述がある。

「天地達観の位には聖人と称し仏陀と号するも、もとより人なれば、畢竟（ひっきょう）我が講求、討論の友にして師とするものは天地なり」

梅園にとって思索作業の師、つまり基礎となるものは聖人、仏陀でもなく、つまり当時の権威ある人々の理論でなく、天地自然だけである、というのだ。いわゆる事物現象を観察することによってしか、梅園の哲学的思索は進まなかったのである。

梅園の、というより哲学としての大命題は天地自然・事物現象の存在論とそれを究明するための認識論であり、これを構築するのに先哲の著作を検討する方法と、直接に自然・事物現象を観察することを基礎とする方法の二つがある。当時のわが国では、前者の方法が主流であった。そのなかにあって、梅園こそは後者の方法を初めて本格的かつ徹底的にとり続けた学者である。この意味で梅園哲学は自然思想、自然哲学、合理思想などと後世いわれるようになったのであろう。そして、この梅園の方法こそが「科学」の基本なのである。とはいっても「観測」を「観察」に置き換えたことが、梅園を「科学者」と定義するのにいささかの抵抗をおぼえるのである。

なお、この方法を進めるに当たり、梅園が自然（事実）と既存の理論との差異の処理、観察と思索における基本姿勢（すべてを疑い、既成概念を捨て去るなど）で示したみごとな見解は、現代の「科学の方法」に通じるものであるが、これについては機会があれば詳述したい。

「賀来飛霞（ひか）」とその業績

大分県芸術文化振興会議顧問　辻　英武

賀来飛霞は文化13年（1816）旧暦1月に宇佐郡佐田村（安心院町）出身の医家、賀来有軒の3男として西国東郡高田町（豊後高田市）に生まれた。母は杵築藩士鈴木弥惣右衛門公豊の4女政子。飛霞は通称を睦三郎または睦之と称した。飛霞はその号であった。父有軒は初め三浦梅園に入門したが、梅園の死後、熊本に遊学し医学を学んで高田で医師として活躍した。飛霞は2歳のとき父が死亡したため母の里の杵築の鈴木氏のもとに行く。6歳で異母兄佐之（すけゆき）の学ぶ帆足万里の門に入り、医学や薬学を学ぶ一方、本草学（ほんぞう）のために画を杵築藩の十市石谷（といしせきこく）に学ぶ。18歳のとき佐之とともに上洛、山本亡羊につき本草学（植物・薬草学）の基礎的知識を身につけた。

天保7年（1836）20歳のとき阿波に遊び、10年には再び瀬戸内海を旅して近江に行き、そのあと尾張、伊勢、更に近江、播摩、浪花（大阪）に行き、「遊湖日記」「遊尾漫録」などを残した。翌天保11年には由布岳にのぼり、「油布嶽採薬図譜」2巻と「油布嶽採薬記」を著わした。

飛霞はその後、乞われて日向各地に採薬行を試みると共に東北・奥羽・北陸にも足を延ばし、各地で植物を採集分類して記録を残したが、それらは「高千穂採薬記」「東北紀行」「奥羽紀行」「日光採薬記」などの著として纒められ、更に島原藩や杵築藩からも委嘱を受けて採薬して廻った。嘉永3年（1850）の西国飢きんにあたっては食用植物の解説をした「救荒本草略説」を執筆した。後、宇佐郡の元島原県管轄の医長として地域医療活動にも取り組むが、明治11年（1878）には東京大学理学部の小石川植物園に招かれ、取調掛として活躍、尾張の伊藤圭介、美濃の飯沼慾斎と共に本草の3大家といわれ、リンネの分類法を取り入れ、近代植物学の基礎を打ちたてた。「小石川植物園草木図説」3巻は日本における植物図鑑としては最初の刊本で、やがてこれは牧野博士の「日本植物志図篇」や「日本植物図鑑」などに引継がれた。

「前野良沢」の人間像

大分県芸術文化振興会議理事　中沢　とおる

「解体新書」は前野良沢一人が訳したもので、杉田玄白は激励者であった。訳した本はオランダ語の近代医学書「ターヘルアナトミア」である。訳した場所は、江戸の豊前中津藩中屋敷前野良沢邸で、訳した過程は、杉田玄白が晩年にまとめた「蘭東事始」に詳しい。この本は、安政二年の江戸大地震で焼失し、その不幸が嘆かれていたが、慶応二年木郷の露店市で写本が見つかり、それが福沢諭吉の手に入り、この名著は生きがえった。諭吉は費用全額を私費でまかない、明治二年正月に「蘭学事始」と改題して出版した。諭吉は、その序の中で「東洋の一国たる大日本の百数十年前、学者社会には、既に西洋文明の胚胎するものあり、今日の進歩偶然に非ずとの事実を世界万国の人に示すに足る可し」と述べ、「解体新書」が近代の扉を開いた日本最初の重大な出来事であると称賛している。

最愛の娘（十五才）が病死する苦痛に耐え、幕府の鎖国政策に立ち向い、この偉大な学問的・医学的大事業が完成した瞬間、その学問的完全主義の立場から早期の出版に反対し、その功のすべてを杉田玄白にさらわれてしまう。玄白は栄光の中に余生を託すが、良沢は、貧の中に学究の徒としての清廉を生涯貫いた。

良沢の生きた時代は、浮世絵、歌舞伎、狂歌など封建の屋台骨を揺さぶる町人文化のぼっ興期であった。二十五万人のお伊勢参りが街道を埋めつくす、江戸の夜空にほうき星があらわれ、通り魔が娘を襲う、西関東二十万の農民が江戸入り口まで迫った〝伝馬騒動〟、汚職花咲りの田沼のわいろ政治の時代であった。奇才をもてあそび、殺人未遂で捕われ獄死した平賀源内は、ターヘルアナトミアほん訳の参加を、良沢からことわられている。

いまと似ている時代。医者、学者、知識人、文化人、いや人間のありかたとして、前野良沢から学ぶことは多い。

第十六回県芸術祭閉幕行事を終えて……

大分交響楽団理事長

山　本　恭　正

大分県秋の恒例の芸術祭も今年はわれわれの演奏会を最後に閉幕した。実は大分交響楽団が閉幕行事を受け持ったのは昭和49年に次いで２回目であるが、６年間に進歩が見られたであろうか。

昭和40年第１回定期演奏会以来、昨年は第15回記念としてベートーベンの第９交響曲（合唱）を成功させ、その勢いで今年はドボルザークの第８交響曲をとりあげた。とくに郷土色、民俗色を強調して、宇佐市出身の清瀬保二氏作曲の日本祭礼舞曲と大分市出身の辛島輝治氏独奏のモーツアルトのピアノ協奏曲第21番を揃えた。これらの意欲と長年の活動、そして県民オペラへの協力などから芸術祭賞を受けることになったと思う。大変光栄であり、これまでの団員の努力が報われたものと率直に喜んでいる。

最近は全国各地でオーケストラ活動が盛んになっており、九州でも九響（プロ）を除いて10指以上の団体が存在している。いわゆるアマチュアオーケストラという言葉があるが、われわれの場合は大学や職域のものとは異なり、職業音楽人を含めて地域の管弦能力を統合したものが大分交響楽団であり、市民オーケストラと呼ぶ方がふさわしいと思う。

従って、その地域の音楽需要にこたえるべき重大な責任が課せられている。今、われわれの痛切な問題は資金面などより、練習場、マネージメント、そして団員の意識強化であり、今回の受賞はむしろ加藤公康常任指揮者の16年にわたる真摯なご指導の賜であるとしか言いようがない。

今後とも一層精進のうえ県民のご期待にそえるよう努力するが、芸術振興会議関係者はじめ皆様の暖かいご指導とご助言をお願いする。

芸術祭賞受賞に厚くお礼を申し上げます。

大分交響楽団コンサートマスター

久　保　不二朗

第16回県芸術祭閉幕行事を無事に終えて、その上に芸術祭賞の受賞を受け、いままで、がんばって練習をしてきた苦労があったと一安心してます。大分交響楽団はアマチュアの楽団としては本当に本番に強く何時もびっくりしてます。練習の段階では団員の全員参加がむつかしく、本当に指揮者にもうしわけなく思ってますが、毎回の公演の度に団員のレベルが向上して名演奏をしてるのも事実です。とくに弦楽器の音がすばらしくなってきてます。その原因は各人が良い楽器を持つようになり、自然に又練習にも熱がはいり、それが良い結果をうんでます。楽器の良否はアマチュアにとっては大変な事で、腕の悪い人ほど良い楽器を持つべきです。ある団員などは、７百万円位のを持ってます。さて、大分交響楽団の今後の課題ですが、第１に全員参加の練習、第２にレパートリーをふやす、第３に中央より指導者を招く、以上が小生の希望ですが、大分交響楽団は今迄は、外部の導入がなく県人のみでやって来てますが、この辺で飛躍をしたらどうでしょうか。吉四六の中国公演ですが楽団が参加できないのは本当に残念ですが、これも経済問題と各人の勤務状況をみると断念せざるをえないことと思います。

終りに、毎年小生が思ってる事ですが、芸術祭の各賞に関してですが、はなやかな舞台でライトをあびてる人々だけでなく、本当に陰で、この人がいないと公演が出来ないという人材をも表彰されるような態勢づくりを願っております。

第16回大分県芸術祭賞等受賞決まる

県芸振会議共催第16回県芸術祭は、97行事という多数の参加によって県内各地で開催、この程終了しました。県芸術祭では、とくにすぐれた行事等に対し各種の賞を贈呈していますが、今年は次の団体・個人に賞が贈られました。贈呈式は、12月25日（木）午前11時から、県総合庁舎内74会議室で関係者一同出席して行なわれました。

なお当日主催者を代表して友田教育長、受賞者を代表して板井南桜山氏の挨拶がありました。

第16回大分県芸術祭賞等受賞者

名称	受賞者	行事名	説明
芸術祭賞	大分県洋舞踊協会	開幕行事 おおいたの祭り	ふるさと大分の古典芸能を素材にして、洋舞踊のジャンルからスポットをあてた地方色豊かな創作バレエを公演して開幕行事を飾り、さらに竹田公演でも大成功を収め、県民文化の向上に寄与した。
	大分交響楽団	閉幕行事 特別演奏会	社会人70名以上からなるメンバーで過去12回の定期演奏会を実施、本年度は第13回の定期演奏会として閉幕行事を担当し、至難とされているドボルザーク作曲交響曲第８番を演奏し、県民文化の向上に寄与した。
功労賞	板井南桜山		尺八の県内第一人者として活躍し、多くの門弟を養成し、又菊池歌幸さんとのジョイントリサイタルを開いたり、他の音楽団体との共演に積極的に参加する等、県民謡の発展につくした功績は大きい。
	竹田市文化連盟	竹田市文化連盟展示会 市民芸能祭	地域文化の振興をモットーに、これまでの内容もふるさとに定着したものを数多くとりあげ、市民に親しまれる文化祭は行事のあり方を示すものとして、その功績は大きい。
	天瀬町 天瀬町教育委員会	天瀬町産業文化祭	町をあげて文化祭を実施、その領域は多岐にわたり、内容も豊かで、参加者も青少年から高齢者に至る幅広い層で、特に青年団は演劇部門で全国大会に出場、その成果を文化祭行事の一環として公演したり、地域総合文化行事のあり方を示すものとして、その功績は大きい。
	佐賀関町文化協会	佐賀関町文化祭	郷土の文化を育て、豊かで住みよい町づくりをめざした文化祭を開催。内容も参加対象も幅広く、住民も積極的で地域文化の向上に寄与した。
新人賞	工藤玲子 佐藤寿子	戦後別府物語 星の流れに	県民演劇制作協議会は、過去７回郷土大分に因んだものを創作・公演してきたが、本年度の第８作目も戦後の別府を舞台にした作品を上演したが、マリ役とキャサリン役を引き受けて、戦後の時代のことを文献や聞きとりで勉強し、見事な演技でこなし、数多くの観衆に強い感銘を与えた。
特別感謝状	辛島輝治	大分交響楽団特別演奏会	閉幕行事の大分交響楽団による特別演奏会に郷土出身者としての立場から多忙なスケジュールの中、第２部のモーツアルトピアノ協奏曲第21番のピアノ演奏を担当し、日本の音楽界で先端をいくその卓越した技術で聴衆に深い感銘を与え、大分県音楽界の今後の発展に寄与した功績は大きい。
	秋吉敏子	秋吉敏子＝ルー・タバキンビッグバンド演奏会	郷土別府出身でアメリカのジャズバンドではNo.１の折紙をつけられている彼女が第16回県芸術祭特別参加行事として夫君とともに、ルー・タバキンビッグバンド演奏会を開催し、多くの聴衆に強烈な感銘を与えるとともに、本県現代音楽の振興に寄与した功績は大きい。
感謝状	大分県歌人クラブほか 共催・参加行事	第16回大分県芸術祭 共催・参加行事	第16回県芸術祭に参加して、行事を実施し、本県の芸術文化の振興に寄与した。

第16回県芸術祭新人賞を受賞して

県民演劇制作協議会会員
工　藤　玲　子

県民演劇に参加して、3年半がたちました。昨年5月に、芸術祭共催行事の参加作品、戦後別府物語「星の流れに」のマリ役をいただきました。それから半年、只、一生懸命役に打ち込んで来た私に、第16回県芸術祭新人賞という身に余る光栄な賞を与えて下さいまして、本当に有難とうございました。

初めての大役、未熟な演技ではございましたが、熱演ということで、皆様から支持していただけ本当に嬉しく思っております。しかし、今年からはそれだけでは駄目で、もっとより以上の、何かを表現出来る役者にならなくてはと、考えさせられました。

演劇は総合芸術。役者だけでなく、スタッフの影の力、応援して下さる観客、そして私達のように働きながら演劇をしている人間にとっての職場の協力が一体になって作られるものです。それを身を持って学ぶ事が出来ました。それ故今回の受賞は、その仲間達や回りの方々の暖かな励ましとご協力に対してのもので、皆様方とともに喜びをわかち合いたいと思います。

大分県における「文化」「芸術」の振興の為、多くの方々が県芸術祭に力を注がれていらっしゃいます。そのお姿は、私達、未熟な者へもひしひしと伝わってきて、じっとしてはいられぬ気持ちとなります。

私は演劇を愛する者として、これからも、芸術祭のお仲間へ入れていただきたい。そして、本当に微力ではありますが、とても大きな意味を持った「新人賞」の名に恥じぬ様、大分県民演劇制作協議会という、地方の演劇集団の中で、全力をつくし、努力したいと思っております。

どうぞ、よろしく御指導の程、お願い申し上げます。

県民演劇制作協議会会員
佐　藤　寿　子

演劇というのは、雲のようなものだと思っています。いつも高処にあってつかもうとしてつかめず、手の中に残るのは、無力感と焦燥の念、ただ、その高処にどれ程近づけたかが私の得られる唯一の充足です。といってそれさえも一瞬のことでしかありません。

そもそも、私には自信というものがないのです。

けれど今回新人賞をいただいたことで、「どうやら、そうひどく間違ってはいないらしい」という安心感を持ちました。そしてその反面で、身に勝った責任の重さに自分の弱さが情なく映ります。「演劇とは？」という問いは答のないまま私の中に居座り続けるのでしょう。

舞台を創ることは、自然に自分を造ることにつながってきます。多くの事柄、様々な人達との関りあいの中には、日常、得られぬすばらしいものを発見します。上手く表現できませんが、それは、〝精神〟といったようなものです。その中にあって、少しでも多くのことを受けとめたいと願っていますが、怠け者の私は、ただただ感動するばかりで、進歩たるや微量でしかありません。けれど、少しずつ、私の中にある余分なもの、つまらないものを振り払っていきたいと思っています。

今後は、演劇・生活・仕事、焦らずじっくり、自分の生き方を見極めていきたいと思います。演ずるということが、いろいろな意味で年々難しいものになっていきます。

さて、私も今年成人式をむかえ、今回の新人賞受賞は、10代の思い出としてすばらしい記念となりました。

最後になりましたが受賞にあたり、ご指導くださった先輩諸氏並びに関係各位に厚くお礼申し上げます。

〈地方文化活動〉

第16回県芸術祭功労賞を受賞して

天瀬町社会教育主事　戸田彰一

第十六回県芸術祭に於いて、栄えある功労賞を受け、真に光栄に存じます。

町の飛躍的発展に大きな期待が寄せられている最近の諸情勢の中で産業文化祭を実施し、「豊かな町づくり」をテーマに第十六回県芸術祭参加の昭和五十五年度天瀬町産業文化祭が中央公民館で十一月十五・十六日の両日開催されました。我が町の産業文化祭の歴史を振り返ってみますと、中央公民館が昭和四十七年に完成し公民館として手がけた各種事業の発表の場を設けるべく「公民館まつり」と題し中央公民館を会場として昭和四十九年まで続けましたが、「公民館まつり」では範囲も狭く、真の意味での文化の振興とはならないのではないか、という反省に立って、「文化祭」に変更し昭和五十年から昭和五十二年まで続けてまいりました。しかし、昭和五十三年に「天瀬町産業文化祭」としての「町づくり」に大いに寄与する町民総参加への祭典の場として誕生致した訳であります。こうして漸次成長して来た「町産業文化祭」も今年では三年目を迎え、年々充実されてまいりました。特に本年は、町農業協同組合、町商工会、天瀬温泉観光協会、その他諸々の機関の協賛を得て産業部門、商工観光部門、文化部門の三部門を設け町行政振興策ともマッチした催しとなって進展した訳です。しかし、まだまだ充実こそしつつあるも、完成までには程遠く功労賞を受賞できたこと自体が過分なことであると思い奮起する次第であります。町民の関心が高まり、参加者が増し、出品物等も増えれば開催会場、時期、当日の運営等がこれからの課題となることでしょうが、将来町民全体をあげて祝う祭りとするためには行政主導型でなく各種グループ、団体等の創意と工夫によった「産業文化祭」へと移行することにより、真の「豊かな町づくり」へ近づくことになるのではないかと想望いたし精進を続け功労賞を意義あらしめたいと存じます。

10冊になる大分県文化年鑑

大分県芸術文化振興会議理事
菅　久

大分県文化年鑑も1980年版（昭55年版・発行56年３月）をもってちょうど10巻をかぞえる。初版は10年前の1971年版（46年版・発行47年３月）であるから一昔前の話になってしまった。

その頃は米田貞一会長、事務局長はその年（46年）に新設された文化室の田村卓夫室長であった。45年８月に会報「芸振」第１号が発刊され、芸振会議の日常活動が文化室の設置と年鑑の編集発行によっていよいよ軌道にのった記念すべき年である。

編集委員は文芸・辻英武、美術・菅久、音楽・北村宏道舞踊・笠木啓子、演劇・渡辺泰三の各氏、総括を音楽の北村氏が担当、文化室の平野昭彦主幹、吉良正利文化係長などと協力して何回か長時間の会議を開いたことを思い出す。そのためか、この10年間をふりかえってみてほとんど形式や方法を修正するところがなくきたことは、初版編集会議がいかに綿密であったかを裏づけるものであろう。

ただ一部補充された点は、記録としての写真が初版には皆無であったのが現在６ページにふえているのが注目される。また、２年目から芸振や県芸術祭などの原稿をまとめる事務局担当者も編集委員として明記されるようになったこと、そして77年版（52年版）から新たに県内主要文化行事一覧が月別に記録され見やすくなった。さらに78年版からは、部門に能楽が登場したことなどがあげられる。

さて、年鑑編集の仕事は全く地味な存在であるがこの10年間つづけて執筆くださった方々が大変多いのには驚いた。執筆・編集委員、とりわけ編集総括の責任は重いと思う。さきほど急逝された広瀬晴四郎事務局次長は６年間の長きにわたって総括の事務をされていたこと、ここに深く感謝の意を表したい。あとを受け持つ十時良氏は10年間のしめくくりである1980年版を担当することになるが、81年版からは形式も新たに、思いきって写真を豊富にした、見る大分県文化年鑑の方向も考えてほしい。

《れんさい》 豊後水道の文芸 その9

大分大学教授　佐々木　均太郎

火野葦平と豊後水道

火野葦平の「ただいま零匹」は、高崎山の猿よせにちなんだ作品である。昭和三十年十一月から朝日新聞に連載。元大分市長上田保氏がモデルであることは周知のとおり。その上田氏も昨年物故されて、猿よせのホラ貝を吹いた主人公も文字どおり小説上の人となってしまった。小説の舞台は大分市・別府市の場面が多いが、そこから遠望する豊後水道の景観の描写もこの作品を際立たせている。

「底ぶかい青さで晴れわたった晩秋の空の下に、別府湾は静まりかえっている。左には国東半島のなだらかな起伏がつづき、右手はるかの佐賀関には、精錬所の高いエントツからたなびく煙が望まれた。その中間の水平線上にかすんでいる陸地は四国だった。夜になる、佐田岬の燈台が光るのが見える。」

葦平は、この作品の取材のため大分市を何度か訪れているが、たいてい別府北浜のS荘に泊っている。ホテルの浴場から見る豊後水道を他の作品にも次のように描いている。

「海がすぐ窓の外に見える。右の方には、サルで有名な高崎山、大分市、製錬所の煙突のある佐賀関、左の方は国東半島が深くつき出していて、両方から別府湾を抱いているが、その水平線の上にかすかに四国が見えていた。よく晴れわたっていて、青い海も静かだった。」

これは、葦平の「日本八景」の中に出てくる一部である。青い静かな海の水平線上に、はるか四国の山々が浮かぶ豊後水道の美観は、これまでも紹介した国木田独歩をはじめ、すべての作家たちが魅了されている。

しかし、その豊後水道もひとたび台風のシーズンが訪れると一変する。葦平の小品「別府夜話」には、次のように描く。「風が強く、別府湾の波が相当のはげしさで岸壁に向かってぶつかって来る。…すさまじい怒涛のひびきと、ときに防波堤のうえにまで飛び散る白い飛沫とで海の荒れていることがわかる。」

文化ニュース

＜芸館催しもの＞

◎九州グラフィックデザイン展大分展

- 昭和56年2月24日(火)～3月1日(日)
- 大分県立芸術会館

＜芸振だより＞

◦芸術文化基金

芸振加盟団体・企業体・一般（個人）のグループにそれぞれ募金責任者をお願いして昭和55年度の募金活動を進めているが、昭和56年1月末日現在、企業体・一般個人については予定目標額を達成することができた。

しかし最大の受益団体である芸振加盟団体の募金納入状況は、作年に較べ、大幅に遅れているので、各団体の責任者は割当目標額達成のため、一層の運動をお願いします。

なお、昭和55年度新たに大口寄付の申込みを受けたところは次のとおりです。

多田工務店	200万円	
新日本製鉄	600万円	
大分信用金庫	200万円	
宮崎　豊画伯	100万円	（個展益金）
飯田　俊一他	60万円	（ダイヤモンド婚式記念）
大分県美術協会	100万円	（小品展）
キムラヤ	50万円	（香典返し）

ピアノ保存友の会会員募集

会員特典

- 調律・修理等特別料金
- 防虫・錆止加工サービス
- ピアノ他当店取扱品の特別料金

大分文化会館・芸術会館・別府観光会館　専属調律師

ヤマハ
デアパソン
シュバイツァ
大分県特約店　白沢ピアノ店

TEL　0975—32—3930